

## ドイツ語音韻把握の基礎 (2)

宮 永 義 夫

本稿は任意の綴りをドイツ語として発音するために、学習者はどのような法則を、どの程度まで承知していればよいかを探る試みの第2部である。これは今日最も求められている言語論理学習の一環であり、学生は自分の姓名の発音をドイツ語で綴るという課題に取り組んだ。その際、文字の使用条件、二重子音字、音節の認識、母音の長短、アクセントなどが重要な問題点として浮かび上がった。

キーワード：言語論理学習 綴り 音節 母音 アクセント

### 1 言語事実と言語論理

筆者は「ドイツ語音韻把握の基礎(1)」<sup>1)</sup>に於いて、英語が世界共通語化する流れの中で、第二外国語としてのドイツ語学習のあり方、理念を模索するうち、言語学習の二つの方向の明確化、意識化が非常に重要であることを認識するに至った。二方向の意識化は、ドイツ語の比較的明快な音韻構造の把握の際、明瞭な例を提示してくれる。これは実際の学習(指導)の場面では、例えば「綴りと発音の関係」の捉え方の二つの方向として現れる。ここではまず「ドイツ語音韻把握の基礎(1)」で述べた理念を違う角度から整理したい。

言語学習の二方向とは、繰り返し述べているように、広い意味での言語構造の把握を目指す方向と、言語の運用能力を訓練する方向である。後者を言い換えれば、言語事実を可能な限り熟知することを目指すという意味であり、前者は文字どおり、言語の構造や法則性を知ることである。すなわち言語論理の把握である。言語論理それ自体を、例えば具体的に文法などといった形で知っていても、言語事実を承知していなければ、言語を知っていることにならないのは勿論である。例えば挨拶などはその典型である。少々戯画的に言えば、Guten Tagという表現を言語論理的(文法的)に取りあえず知っているということは、gutが形容詞、Tagが男性名詞であって、4格として使用されており、冠詞類を伴っていない。この場合生起する形容詞の強変化によれば、語尾はenであるからGuten Tagとなる、といったことである。しかし、この表現は全体で「こんにちわ」の意味であり、日中、人に出会ったときに一般的に用いられることを知っていて、ふさわしい場面で応用して実際に発音出来なければ役に立たない。このようなことをひっくるめて言語事実の知識と呼んでおきたい。筆者がここで言語事実と呼んでいるものの中心的イメージは、ある単語なり表現の実際の使われ方、プラグマティックスで扱うような概念、あるいはどう発音され、どう書かれるかといったことの総体である。従って、こういう時にはこういう語彙、こういう表現を用いる(べき)ものであって、その正しく、

ふさわしい発音、リズム、イントネーションなどはしかじかであるといったことを想起している。このようなことは、大きく言語行為に属する事柄であり、延長上には、ある表現が威嚇であったり、慰め、また、不満や批判、賞賛の表明であることが分かるというようなことも含まれる。言語の記号的側面に注目すれば、上とは方向の異なる重要点が見出される。即ち、レアリアの理解である。言語によって生み出される(抽象)概念も多いが、基本は外界にある実体を言語という記号が表している。これは文化理解へと繋がるものであるが、その言語の使い手がどのような衣食住環境にあり、ある言葉でどんな実体を表しているかを知ることは大変重要である。学習コースとしては、Landeskundeの分野に入るであろう。Fensterと窓とは必ずしも同じではない。辞書のようなメタ言語的説明では十分ではないのである。ここではレアリアをも言語事実を含めても構わないと思われる。また、上に言語論理の例として挙げた初歩的文法事項も、確かに論理へと繋がっているが、それそのものとしては、基本的事実に他ならない。イデオムは言語事実の典型的現象であり、社会的約束事として人はこれを恣意的に改変することは出来ない。しかし、文のレベルになると自由度が飛躍的に高くなる。ここでは言語の創造的使用と言うべき活動が行われており、これを支えるのが言語論理である。コミュニケーションが成立するためには、人はコードを共有していなければならないが、これは即ち法則性の共有であって、言語事実が言語が発せられるまで存在しなかったのである。言語行為は大量の言語事実によって満たされており、真に独創的な言語使用は現実にはほぼ不可能である。Guten Tagという表現が表層に於いて、まさにこのような形を取っている事実、また取るに至るプロセスは全て言語事実に取り込まれていて、改変不可である。この挨拶は構造的には形容詞+4格男性名詞である。言語論理の働きとして、代数に数を代入する類を試みる。即ち語彙を入れ換える、Guten Morgen, Schönen Tag, 更に条件をも変える、Guter Tag, Gute Nacht, そうすると言語事実の壁に阻まれて、1格は挨拶としては排除されてしまう。その他のものは言語事実として、既に蓄積済みである。逆に、このタイプの挨拶

の骨格をなすものは形容詞 + 4 格名詞であることが分かる。それならば、この構造を持つものはみな挨拶になり得るのであろうか。また別の言語事実の壁に阻まれて、新たな条件、構造が作り出される可能性がある。このようなプロセスを言語論理と呼びたい。このように言語論理は項を繋ぐ演算子のようなもの、それに対し言語事実はそれぞれの項のようなものとして例えることが出来る。二つは相互作用を繰り返し、学習が進めば、知識は総合化されて大きな言語事実の如きものになるであろう。言語事実学習は知識の空白を実例で埋めて行く作業であり、言語論理学習は仮想世界を作り出す作業である。

ところで、筆者は(1)に於いて、英語の世界共通語化、鈴木孝夫の用語では交流言語化に関連して、英語使用によるコミュニケーションの困難さの増大を述べ、英語による同床異夢という言い方をした<sup>2)</sup>。困難が増大するという表現は、必ずしも正しくはないであろう。この記述の意図したところは、人がそれぞれの母語でない、第3の言語でコミュニケーションする場合、双方の言語能力は、母語に比べれば明らかに制限されたものにならざるを得ず、相乗効果もあって、情報の伝達は相当の隘路を通じて行われることになるということであった。困難であることは間違いない。ところが、共通言語がない場合、どちらか一方の母語を他方が学習することになり、困難さは勝るとも劣らない。ここで修正しておきたい。

さて、上述のことは、拮抗する2つの理念に対応している。実質的に英語がその役割を果たしている共通(交流)言語主義と多言語・多文化主義である。ただ、多言語主義の場合、前述のように一方の母語を他方が学ぶということの意味するのではない。それでは言語支配である。相互に相手の母語に接近しようとする態度である。具体的場面に於いては、お互いに相手の母語を使うようにするなどということは、事態を錯綜させるだけであるから選択されず、一方的になるであろうが、いつでも立場を交替出来る可能性を確保しようとするのである。相手の母語に接近を試みる多言語・多文化主義の場合には勿論のこと、英語による共通語主義の場合に於いても、母語使用者は存在する。ここで、素朴な母語使用者を定義すれば、その言語の言語事実を熟知しており、言語論理をほぼ無意識に展開出来る人のことである。あるいは、豊富な言語事実の知識から、内省によって帰納的に(のみ)言語論理を意識出来る人といってもよい。外国語学習の一つの大きな目標が外国語の母語化であるから、言語事実を集積して論理を無意識化出来ることが理想である。これを行うのが言語事実学習であり、言語事実を可能な限り集積すれば、内省によって言語論理を把握出来るまでに至る。ここでは何よりも体験量が最大の要素となり、あらゆる角度からのトレーニングがほぼ唯一の手段である。言語事実学習、あるいは言語事実を習得したということは、対象言語(相手)に身を委ねる事なのである。交流言語とされる英語の場合には、後述のように別の問題もあるが、母語としての英語の原点を探せば、やはり常識的には英米文化圏になり、ドイツ語の場合、国(家)語(公用語?)という観点からは、比較的明瞭にド

イツ語文化圏を把握出来る。ここで対等性を意識すれば、相手にもこちら側の母語の学習を促すことになる。これは即ち言語相対主義、多言語・多文化主義である。

共通語主義は、母語使用者が存在しないことが前提である。英語を共通語とする場合、多言語主義の一定局面と同じことになるから、容易に単言語主義に陥る。これは表面的ではあっても英米文化をそれ以外の文化圏の人々が身に付けざるを得ないことを意味する。これを容認することも一つのあり方である。これを認めないとするれば、エスペラントのような人工言語に頼るか、母語使用者にその言語を母語として使用することを断念してもらう、あるいは外国語として意識し直してもらうことになる。このような英語を鈴木は母語使用者の存在する English と区別して Englic と呼ぶ<sup>3)</sup>。また、東南アジアやインド、その他の地域へ様々の事情によって拡散し、事実上の地域共通語となっている英語の多様性を認めて Englishes と複数形で呼ぶことも行われている。これらの「英語」は、確かにその地域内では母語ではなく共通語であるが、日本語圏に於けるドイツ語といった純粹の外国語とは違って、生活言語なのである。即ち、英語という言葉がその地域のレアリア、文化に言語事実として対応してしまっており、例えばイギリス英語の言語論理とは異なる論理を持っている。言語相対主義を以て、その地域外からそのような言語使用者(文化、社会)に接近しようとするれば、一つの新たな外国語を学ぶことになる。鈴木と言う国際交流言語イングリックは、一種の抽象態であり、実際には異なる言語事実、言語論理を持つ諸言語の使用者がそれらの言語の基本構造に於ける一致点を手がかりにしてコミュニケーションしている状態を指すといつてよい。極端に言えば、イタリア語を話す人とスペイン語を話す人がお互いに母語を使用して会話が成立する様を想起させる。そして、日本という地域のレアリア、文化に対応する言語事実・論理を備えるイングリックの姿を想像するのは難しい。

多言語相対主義はお互いに他者(相手)の言語を尊重し、その文化への同化を図る。従って、トレーニングによって言語事実を集積し、母語使用者(相手)と同等になることが目標であり、理念上は実現可能である。共通語主義の場合、言語事実は不確定なのである。言語事実そのものを確定、あるいは取り決めて行かなくてはならない。また、外国語学習の果てしなく長い途上にあつては言語事実の蓄積は不十分である。何れにしても、ここで重要になるのは言語論理なのである。確かに、言語事実学習によって事実を十分に集積すれば、一応はその言語をマスターしたことになり、一方、言語論理によって獲得された法則性は、見出されてしまえば単なる抽象的な言語事実に止まり、それだけでは言語の学習にはならないのであるが、今日最も求められているのは、ある特定言語の習得ではなく、コミュニケーション能力である。コミュニケーションは言語の問題を超える広範囲な問題圏を持っているが、言語問題に縮約して捉えれば、他者との交流は絶えざる新たな外国語学習のようなものである。ある人の人間性を言うとき、その人の言語は属性の基本

的規定になる。コミュニケーションの場に於いて、人＝言葉と置いてもあながち滑稽な比喻とはならない。ある人(言葉)と深く付き合い、愛することもあれば、多様な人々(言葉)とどのように折り合いをつけるかも重要である。特に後者の場合が問題なのである。即ち、同化を目指せば他者の言語事実の集積不足、共通化を目指せば事実の未確定という状態で、恒常的に他者と向き合わなくてはならない。その場で論理によって事実を確定したり、想定したりし、それをフィードバックする能力こそが鍵である。今、本当に求められているのは言語論理学習なのである。

## 2 教室にて

### (1) 自分の名前をドイツ語風に綴る

言語論理学習は数列の法則発見や虫食い問題に似ている。多くは文法と重なるが、それだけに止まるものではない。この分かりにくい言語論理の学習をどのように実践するかについて考えを廻らしたところ、比較的明快な音韻把握分野では、例えば任意の発音をドイツ語の綴りではどのように表し得るかといった問題と捉えられることに思い至った。よい素材を探すうち、学生に自分の姓名をドイツ語風に綴ってもらった課題に行き着いた。実際のドイツ語には一見関わりをもたないので無駄なことのようではあるが、それは言語事実学習の発想なのである。ここにはドイツ語の姿を特徴づける最も基本的な法則が現れて来る。

当初は、ドイツ語の基本的な綴りを覚えてもらうことが目的であったが、ローマ字音の近似音が特徴的に異なる文字あるいは綴りになるものを認識してあげようとした。筆者の姓名を例に引けば、ローマ字Miyanaga Yoshiolはyをjに替え、shをschに替えれば、取りあえず読んでくれる。即ちMijanaga Joschioである。古いドイツの地図では、Jokohama, Fudschii等の表示もある。ここで念の為申し添えれば、ドイツ語ではこのように書くことになっているということではない。発音の目安であって、あくまでもドイツ語として発音しやすい綴りを探っている。ローマ字表記そのものがアルファベット言語への歩み寄りであり、それ以上はその綴りで可能な限り日本語と同様の発音をしてもらうようにするのが、相互主義の行き方である。姓を先にするか後にするかということも、この問題である。公式には姓を先にすることが推奨されるようになった。これは、漢字などで正式に姓名を記す時、姓を後にはしないことを考えれば当然である。ローマ字に於いても、日本語である以上、これを踏襲するのが基本である。しかし、ローマ字使用は、前述のようにそれ自体がアルファベット言語への歩み寄りなのであり、一種の説明、言語論理を話題にしているメタ言語的行動である。A言語をB言語で説明しているのである。ここではドイツ語の環境に入っている訳であるから、ドイツ語の基準であるVorname, Nachnameの順序に従うべきかどうかということも考慮に入れる必要がある。

### (2) 拗音とj, ヲ

y=üは円唇前舌母音であるが、拗音を名に持つ学生は

困難を感じたようであるが、多くはyをjにして切り抜けた。これは当然予想されたことである。例えばkyo=kjoである。しかし、これはドイツ語にある程度馴染んでいる者から見ると奇妙な感じを受ける。即ちこのような綴りは事実として、極めて希で、殆ど拒否されてしまう。確かに一般名詞にはFjordその他があり、人名にもFridtjof [ˈfrɪdʒɔf] などというものがあるが、これらは北欧語起源であり、また、本来ドイツ語のjは半母音ではなく、子音として扱われている。これは有声硬口蓋摩擦音であり、対応する無声音はchの[ç]である。それならばヤ行もjでは厳密にはおかしいはずであるが、まずは近似音として認められている。また逆に、ドイツ語語彙の中にはそのような綴りを持つものが現に存在し、実質的には半母音に極めて近いのであるからkjoでよいとする考え方もある。しかし、これはドイツ語の発音としては例外的なものであり、一般的にはjの子音性のために分離が起こりk-jo、つまり言ってみればクヨーのように聞こえてしまうと思われる。Muthmannによれば、/kj/を語頭に持つ語はKjökkenmöddinger, Kyu, Ku-Klux-Klanの非常に特殊な3語である<sup>4)</sup>。語頭に立てば音節頭に立つと考えて差し支えないであろうが、クラウン独和辞典のCD-ROM版を検索しても、kjを綴りとして持つ語はなく、発音記号内に持つものとしてBarbecue 1語があった。後は、zurückjagenとwegjagenのみで、いずれも音節が切れている<sup>5)</sup>。音節頭で子音字にjが後続する単語は、北欧語ないしはスラブ語起源として言語事実認知されている語でなくては、受け入れがたいところがあるのではないか。その他の語は綴りにjを使用せず、更にドイツ語的綴りに直せる程である。言語事実とすればiを使うのであるが、ここまで到達した者は少数であった。勿論要求範囲外である。ioはやはり基本的には/io/であって、/jo/にまでにはならないので、二重母音以外は個々独立した母音の連続とした方が事実に対応出来る場合があるが、ある程度速く発音すれば、iが半母音化して1音節になる<sup>6)</sup>。従って、「東京」の発音に最も近似するのは取りあえずTokioである。ちなみに、Tokyoはトーキョオ、Tokjolは音節の切れ目が不安定で、Tok-joになる可能性が高い。この場合、トックヨとなる。実際かつては、Tokio, Kiotoなどと綴ったが、今日ではTokyo, Kyotoと綴るのが一般的である。筆者の名、ヨシオ, Joschioの場合はイオであるのに、Tokioはヨーのつもりである。半母音か否かの区別はJoschioといった記号を予め取り決めて使用する他に、綴りだけでは対処のしようがないようである。ということは、ドイツ語に於いてこの種の半母音は、速度などが関連する発音の変異であって、音素としての働きを持つものではないことを意味する。また母音の長短も度外視したままである。更に、jの子音性からすれば、ヤ行に於いてもiを使う方がよいとも言える。するとJoschioとなって、あたかもラテン語のようである。同様に、ワもwaと表記すると[va]になってしまうので、ウアと区別がつかないが、uaとする他はないのである。

### (3) 音節の認識

今回の課題では、比較の為、名をローマ字にした際、ドイツ語の音韻規則ではどのように読まれるかを同時に問うた。その中に、一見当然でありながら、ドイツ語の綴りの特徴を認識させるのに好都合の一例があった。Yoshioならばどう読むか。一般的にはYos-hioと切れてしまう。ユオスヒオなどとなる。[ʃ]はschであるから、shは明らかに英語(中には日本語のローマ字や中国語などが英語式綴りで導入されたものがある)と認識される語彙に限って、語頭/末、ないし音節頭/末に現れる。Shop, Finishといった語で、数は多くない。語中の場合、shの後が子音shC(C=子音)ならば、音節の切れ目はsh-Cでしかあり得ない。つまりこれは英語系のshで終わる語彙に何らかの子音で始まる要素が後続したものなのである。s-hCは殆ど可能性がない。これはhの性質による。h字は無声声門摩擦音と無音の用法がある。いわゆるハ行の摩擦音が発音される為には、hの直前で音節が切れ、母音が後続する必要がある。これ以外の場合はいずれもhは発音され得ない。即ち、hが音節末である場合(Kuh)や、音節頭であっても子音が先行している場合である。Ch型はギリシャ語系の有気音の表記から展開したものが多く含まれるが、rh, thのように、hがなくとも同じ発音であるか、ch, ph, sch, shなどのように全体で一つの特有の音素を表すものもある。そして、hC型でもhは発音出来ないが、この綴りは極めて希なのである。小学館独和大辞典にて語頭にhCを持つものを検索すると、Hjalmar(ヤルマル、ヒヤルマル、北欧系の男名)、hm(エヘン、ふーむ、間投詞)、Hradschin(プラハのラジーン城)、Hroswitha(Roswithaの古形、ロスヴィータ、女名)、Hsian(西安)、Hsiang Yu(項羽)、Hsin-lo(新羅)、Hsi-tai-hou(西太后)、Hsiung-nu(匈奴)、Hsiyu(西域)、Hsüan Tsang(玄奘)、Hsüan-tsung(玄宗)、Hsün-dsi(荀子)で全てである<sup>7)</sup>。文学史上には、Hrotsvit von Gandersheimの名も見える。10世紀の文人修道女である。一見して非常に特殊なものに限られることが分かる。Hjalmar, Hradschinは強引にhを発音することがあるようであるが、後続母音を伴わないハ行音は、実質的にchに限られると言ってよい。hsは専ら中国語名の表記であるが、この時sは無声音である。条件を音節頭ということに拡大すれば、更に増えるとは思われるが、同じような類の語彙であろう。

反対に、hV(V=母音)で始まる音節ならば、フランス語、スペイン語などのhを発音しない言語に由来すると認識される語でなければ、hを発音する。従って、語中でもChVとなっていれば、音節はC-hVと切れ、hを発音するのが大多数である。shで例を挙げれば、Altersheim, bisherなどである。ところが、VhVとなると、hが長母音を示し、発音されないことがある。Ruheなどは、分綴法ではRu-heと分けるので、少々混乱するが、構成要素から見れば、Ruh-eと分けられるので、h字は音節末に位置し、読まれないのである。ただし、このRuheのように発音できる条件が揃っていれば、場合によっては発音されてしまうことがある。例えばこの語を子供や学習者が誤ってRueなどと書いたのを訂正しようと

する時、スペリングを言わないとすれば、ルーへと強調して言うであろう。また、舞台などでも聞かれることがある。hを発音するかどうかを学習者が判断する材料としては、まず、phやchなどでないことを確認して、hの後が子音であれば発音出来ない。万が一発音するものであっても、それは上に見たような語彙であるから、全て発音しないでもよいものである。hの後が母音であっても、hの前に子音しかない語であれば発音されない。このように、発音されないことを確定する方が比較的容易である。以上に当てはまらなければ発音される可能性があるが、発音可能なところでも発音しないことがあるので諦めて調べる、ということになる。ただし、動詞の不定詞などは、sehenのように、確かに分綴はse-henではあるが、構成要素としては必ずseh-enなのであるから、hは間違いなく長音の記号であり、上述の強調がなければ、発音されない。

#### (4) 二重母音

hの問題を取り扱う中で、名前に「平」を持つ何名かの学生から、非常に興味深い事例が寄せられた。多面的な考察に好例を提供する為、仮にシューヘイとする。この名前の場合、まずはhの問題から離れたところから出発する。最も基本的な問題は、ヘイをheiと綴るとハイと読まれてしまうことである。確かに、二重母音ではなく、音節が切れる母音の隣接であれば、Kaffein, カフェインのように発音されることもあるから、このままでよいとするのも一つの考え方である。しかし本来、ローマ字を日本語表記として正しく読むべきところ、本課題ではドイツ語表記に歩み寄ることを目指しているのであるから、なるべく/ai/と読まれないものにしたい。思い付かれた一つの手は、ヘイではなくヘーでよしとすることである。するとhehとするか、あるいは、東京をTokioとしたようにheでもよいことになる。オウ・オーとエイ・エーでは音の差の印象が少し異なるように聞こえるが、漢字の音読みの場合は、ドイツ語のようなはっきりとした二重母音ではないし、かといって後続母音が単独で音節を作る程強くないことから、長音と捉えるのが実際である。特に、トウをtouとすると、ドイツ語にはこの種の二重母音はないから、音節が切れてウが強すぎるか、あるいはTouristのような英仏系の語が多いため、/tu/と発音したくなる。単母音字でも長音を表すことが出来るが、確実に長音に固定するにはhを付加する。確かに多くの場合、aa, ee, oo, ieも長音を表すが、音節が切れて、単独母音の連続となる場合がある:Familie [famɪˈli̯ə], Laokoon [laóːkoon]。更に言えば、ii, uuの場合は、必ず音節が切れ、イイ, ウウであるということを意味している。ここまでの考察で、シューヘイを表記すると、例えばSchuhhehになる。ヘイをヘーと見なすことをよしとしなかった学生は、一つの解決策にたどり着いた。エイをaiと綴るのである。実際にこの綴りにお目にかかるのはeuropäisch他いくつかの語に限られるが、これならばエイにしかならない。二重母音にならず、iが少し強すぎるくらいはあるが、優れた解決策である。

ここで余論として、aiが二重母音にならないことにつ

いて、言語論理を展開してみたい。検索すれば、言語事実として、*ai*は二重母音ではないことは分かるのであるが、この仮説をたてるのが、言語論理の一例である。事実を確認したくなる要因として、*au*がある。これは二重母音であり、*/oi/*である。そもそもドイツ語の二重母音は*/ai/*、*/au/*、*/oi/*、の三つの下降二重母音にまともっており、希に*/ui/*が出現する。*äu*は*eu*と同じであり、音韻変化の結果*/oi/*となった。*ai*が二重母音ならば*ei*と同じであり、音韻変化して*/ai/*になる。それならば*ai=ai*となってウムラウトをつける意味がなくなる。従って*ai*は二重母音ではないのである。更に問題を広げれば、ドイツ語の場合、下降二重母音に限られているから、音節主音は出だしの母音にあり、後続部分が副次的に舌などの移動の方向を表していると言える。従って、*au*は実質的に*/ao/*に近いなどと言われる。ということは、元来の*ao*は二重母音ではないが、この綴りでも二重母音化を起こすことは十分考えられる。そこで検索すると、果たせるかな、例えば*Tao*（ターオまたはタオ、タウ）は*Tau*（タオ、タウ）と全く同じ発音でもよいことが分かる<sup>8)</sup>。*eu*の発音は最後まで円唇が失われず、厳密には[jy]であって、本来の非二重母音*oi*とは異なる音であるが、*oi*の綴りにも同様の二重母音化は起こっており、*toi*, *toi*, *toi*や英語由来の*Boy*にまで及んでいる<sup>9)</sup>。*ai*は本来、二重母音であるから、*mein*と*Main*が同じ発音であるのは言うまでもない。論理を進めると、*au=ao*であるならば、*ai=ae*、*oi=oe*となるはずであるが、実際に*ae*、*oe*の綴りを用いると、融合してウムラウトの代替となるか、固有名の場合は*a*、*o*の長音を表すことがある。勿論、二重母音でなければ問題は無い。

#### (5) 二重子音字

さて、*Ei*を*ai*とする優れた解決法を得て、*Schuhhäi*を*Schuhhäi*と表記するに至ったのであるが、ここで問題となるのは、二重子音字である。原則として、二重子音字は前の母音が短母音であることを示す。それでは先の綴りは*Schuhhäi*などと読まれる可能性が残ってしまうのであろうか。事実としては、*hh*という二重子音字はない。クラウン独和辞典の検索では、全て音節が切れており、*juchhe*というかけ声、囁し言葉一語を除いては、語構成要素の切れ目でもある<sup>10)</sup>。この一語にしても厳密には*ch*と*h*の結合である。これを言語論理的に説明しようとする、二重子音字の条件が問題になる。二重子音字が語中にある場合、これを音節のどの位置に置くかは意見の分かれるところであるが、音節末に位置出来る音のみが二重子音字として表記され得るのである。従って*hh*、*jj*はない。勿論これは、*h*や*j*が文字として音節末に来ないということを意味しているのではない。*/h/*や*/j/*が音素として音節頭にしか現れないのである。*h*は前の子音と一体になっているか、前が母音ならば長音記号であるから、いずれにせよ無音である。長音記号である*h*が短母音記号である筈の*hh*になるのは、それだけで矛盾である。音節末の*j*は、音としては*i*で、それも外来語の装飾的綴り、*aj*、*oj*に専ら使われている。これらは二重母音である。唯一、ハンガリーのワインの名産地、

*Tokaj*にはドイツ語化した[tó:kar]の他に、[tó:kaj]という発音も併記されており、*/j/*が音節末にあるが、考えに入れなくてもよいであろう<sup>11)</sup>。その他の通常二重子音字にならない字を探すと、*q*は*qu*と使われ*/kv/*という2音素を表す上に、第2音は有声摩擦音であるから、母音が後続することが前提になる。ということは*qu*は音節頭用なのである。2音素を1字で表してしまうのが*x*で、二重子音字になり得ない。とは言っても、*Exxon*という著名な企業名が現にある。これは、先行母音の短母音化が子音字を二重にすることによって初めて果たされている訳ではないので、単なる綴りの装飾である。その意味では、*qq*なども綴りとしては全くあり得ない訳ではない。*v*、*w*も極めて希である。*v*は*evviva*しか見つからなかった<sup>12)</sup>。この語も*et viva*が同化して出来たもののようである。*v*字を*/f/*に固定して発音する語彙は既に定まったものであり、その大多数は語頭に*v*を持つ。従って、それらは二重子音字とは縁がない。末尾、語中で固定されている語彙は*Nerv-en*、*Frevel*ぐらいで、これも関係がない。*vv*の可能性があるのは、従って*/f/*と*/v/*を交替させる外来語ということになるが、これも、事実として*v*は長母音に後続することが殆どなのである。短母音の後であっても、非アクセント位置の短閉母音で、この時二重子音字は用いない。*w*も同様に、後続するとすればまず長母音で、そもそも語頭が多い。同系統の*struwwelig*、*Struwwelkopf*、*Struwwelpeter*の3語が挙げた<sup>13)</sup>。「もじゃもじゃ頭のペーター」はかなり有名なキャラクターではあるが、これらは方言と規定されている。標準語では*ww*ではなく*bb*である。そもそも二重子音字に子音が後続するのは、*ebben*に対する*ebbt*のように、殆ど語の活用によるものである。基本的に、二重子音字には母音が後続する。*v*と*w*は有声無声を交替させる摩擦音であるが、*vv*、*ww*とした場合も、母音が後続するのが普通であると考えられるから、原則的に有声である。ところが、*s=/z/*を含めて、有声摩擦音は通常、長母音に後続するのである。*v*、*w*単独でも長母音に接続するものが殆どであることは、逆にこれらも有声であり、母音が後続することを示唆している。*ss*の場合は、短母音を表すと同時に無声化を表している。*essen*はエッセンであるが、*esen*とすれば、必ずエーゼンであって、エゼンは欠けている。ちなみにエーゼンは可能で、*eßen*と綴ればよい。つまり、*vv*、*ww*は非常に特殊な条件を備えた場合に限られるのである。*kk*、*zz*は存在するが、それぞれ*ck*、*tz*で綴りが代替されているものが多いので、少数に止まっている。

#### (6) 分節と母音の長短

二重子音字の使用に関しては、それを含む綴りを持つ語彙を集積すれば用が足りる為、指導の場に於いては、その使用の条件や可能性について、踏み込んで取り扱うことは迂遠的であり、必要もないが、言語論理にとっては、重要な視点を提供する。二重子音字は、先行する母音が短母音であることを示す記号であって、原則としては単子音字と同じ音である。その役割からして、単音節の場合は必ず音節末側に現れる。複音節語の語中にあ

て、母音が後続する場合、有声無声交替などのことを考え併せると、音節頭としたほうが分かり易い。例えば Roggen [rɔgən] の場合、分綴は Rog-gen であるが、gg は音としては g と同じ一つの音であって、有声の軟口蓋破裂音として実現しているので、音節末(少なくとも形態素末)には障害音は無声音しか出現しないという原則を保持すると、音節頭ということになり、音としてはあたかも Ro-ggen のように切れる。ただし、開母音は閉音節を形成するという原則を保持しようとする、接合音のような考えを取り入れて、音の中に境界があると見なさざるを得なくなる<sup>14)</sup>。接合音は二重子音字として表記されるところとも言えるが、この「開母音は閉音節だけにある」という原則さえ破棄すれば、このような理念的、抽象的把握をしなくて済むのであるから、開母音は開音節にも現れると見なした方がよい。むしろ、論理は逆なのではないか。母音間に子音が一つだけ存在する時、ドイツ語では、形態素など、より上位の纏まりの切れ目も含めて、子音は後続音節の初頭とすることが優先する。動詞の活用などはその典型で、leben は形態から言えば leb-en であるが、分綴も音節も le-ben とする。この方が整合性もあり、前者の分綴ではレープエンになってしまう。heilig も形態的には heil-ig で、音韻的には heil-ig である。英語では形態要素が優先し、分綴は例えば、teach-er であるのに、ドイツ語では Leh-rer である。音の分綴もこれに倣っていると思われる。この点に、「ドイツ語はローマ字読み」という常套句の真の意味があるのではないかとさえ思われる。このように後続子音が後の音節に送られる場合、核が長閉母音であっても短閉母音であっても開音節が成立する。ここで単音節語を考えると、開音節の場合は原則として長閉母音に限られる: da, ja, zu。(勿論、厳密には例外もある。à la carte などは既にドイツ語の語彙に入っており、à も la も短母音であるが、これらはフランス語であり、ドイツ語よりも先にフランス語の発音規則に従っている。) その延長で、複音節語にあっても、特に当該音節がアクセントを持つ開音節である場合、長閉母音として認識されてしまう。短閉母音であることを明示する為に、これと対になっており、先に原則から除外した「開母音は閉音節を作る」という強力な傾向が利用される。即ち、字を重ねて、視覚的に閉音節を作り出しているのである。つまり、二重子音字は基本的に、母音間に一つの子音しかない時に先行する母音が短母音であることを示す為に用いられる。従って、二重子音字には原則的に母音が後続する。それならば、schnell のような単音節末の二重子音字をどう説明するのか。これらの語には活用(曲用)によって語尾が付加される。schnellen であれば、構成要素は schnell-en であり、分綴は schnell-len、実質的音節は schne-llen である。語の一連の活用の中に含まれる単音節形に於いても、統一性、整合性の為に二重子音字は保持されると見なし得る。代名詞、前置詞といった無変化の語の場合には、短母音であっても二重子音字を用いない例が多くある: das, es, an, in, mit など。中には整合性が破られているものがある。Bus/Busse, Kenntnis/Kenntnisse, Lehrerin/Lehrerinnen などである。

Kenntnis の nn の場合、単独では余剰であるが、系列の中に kennen があり、整合性がある。教科書中にしばしば記載される発音原則に、(アクセントのある)母音に後続する子音が一つまでならば、その母音は長く、二つ以上だと短い、というものがある。長音は、短音と音質が余り区別されない a, ä を除いて、閉母音のみに出現する。最も基本には母音の性質がある。そして、閉母音は開音節に、開母音は閉音節に現れ易い。音節を意識すれば、むしろ後続子音が 0 (開音節) の時、長母音であり、1 以上 (閉音節) の時は短母音とするのが目安としてより正確である。上の教科書用原則は単音節の場合には、そのものとして妥当するように見えるが、複音節語の語中の場合は、子音が一つというのは、実は先行音節が開音節に還元されることに本質がある (Name)。dan-ken のように二つの子音が連続しなければ、先行音節が閉音節にはならないのである。複音節語末の音節となると (dan-ken)、語尾の拡張要素である可能性が高く、上の教科書用原則は殆ど当てはまらない。また、語の活用形も同様である (lest, sagt)。これ自体は、適用範囲を厳密にすれば問題ないことであるが、これが意味するところはむしろ、単音節語の場合、末尾音が一つの語では、語尾付加によって、開音節が成立する可能性が大きいということである。長母音を持つ閉音節の単音節語は開音節の性質を強く持っていると言ってもよい。Tag の複数形は Ta-ge として実現するから、開音節を形成し、アクセントを伴って、長母音となる。むしろ単数形が Ta-g とでも記述すべき構造を持っていると捉えられる。子音のみでは核となるべき母音を欠いているので、音節を形成出来ず、先行する音節に吸収されてしまうが、長母音は開音節として充足しており、いわば g は余剰の位置にある。

先に見た教科書用原則は、以上のように音節の見地からすれば、修正を余儀なくされるものであるが、ここに至って、別の意味での正しさがあるように思われる。即ち、Tagel は音節では Ta-ge であるが、形態的には Tag-e である。同様に danken は dan-ken であり、dan-en である。このように、多くの場合、音節の増加は語尾の要素の付加によって実現している。単音節の、いわば語根といった基本要素から出発する場合、形態を優先させる方が捉えやすい。Tag-e, dank-en のような活用変化以外にも、Ruh-e, Name-e のようなものも拡張と捉え得る。このような捉え方をした時に教科書用原則はより正しいのである。拡張を捉えようとする時、大きな役割を果たすのが曖昧母音シュワーである。曖昧母音については、それ自体詳細な考究を必要とするものであるが、本論ではそこへ踏み込むことは出来ない。曖昧母音を中心とした母音で始まる接尾辞は、ドイツ語では語幹側末尾子音と接合して音節を形成すると見なされるから、形態的分節と音節的分節にずれが生じる。形態的分節は Lehr-er であるが、音節的分節は Leh-rer である。同様に、Üb-ung (形態) に対し、Ü-bung (音節) がある。このような形態素末で音節頭であるような音こそ接合音と呼べるかも知れない。従って Tagel は Ta-g=e のように分解出来るのである。これは単に音をばらばらにしているように見えるが、示そ



うとしているのは、むしろ音の接着である。本来の接合音はRoggenのggのようなものをどのように捉えるかという問題から発生した概念であるが、Tageのgにも接合音的な性質があるとした。音節頭／末の子音群の並び方及び数には制約があるが、詳細は問わないことにする。音節頭の子音数と音節末の子音数は連動していないので、音節全体の音素数は一定していない。子音数が多くなればそれだけ音節の実時間は長くなる訳であるが、音節の成立は、あくまでも母音あるいは母音に準ずる音節核を形成する子音の存在を前提とするから、音節の長さは母音の長さで見なすことが出来る。母音字で始まる場合は、声門破裂音が先行するから、子音(数は不問)+母音で同じ長さ(量)を持つ開音節が成立する。この時、長(閉)母音の開音節と短(開)母音の開音節が同じ長さ(量)を持つ基本的音節と見なし得るのである。これを仮に完全音節と名付けよう。閉音節は、末尾の子音が1音で成立するから、短母音の開音節末では2音目からは余剰と捉えることが出来る。長母音の開音節では末尾子音は全て余剰である。音節末の余剰音は次音節の音節頭の性質を帯びる。短母音の開音節は不完全音節であり、前後の音節へ接着する。不完全音節の単音節語はないと言ってよい。従って、先のà la carteのà, laなどは完結した一つの語彙とは見なし難いとも考えることも出来る。Tageのgelは不完全音節であるから、taとgeが対等に連続しているのではなく、gを接合点として前に密着している。曖昧母音eを末尾に持つ語彙は共通してこの性質を帯びている。曖昧母音は子音の音節化といった働きを専ら果たしている。更に考えを広げれば、語中の母音は声門破裂を伴っていないので、必ず前に子音を要求する。言い換えると、長短にかかわらず、語中に母音から始まる音節があるとすれば、不完全音節であり、完全になるためには後に子音を要求する。このようにして、Philosophieのような長い語も、初頭音節が短母音であるために、Philosophieであると同時に、philosophieのような切れ目が想定されるが、これでもなお中間の音節は短母音なので不完全である。中間の子音は両側の母音から要求されてしまう。全中間子音が接合音的であり、あえて書けば、Philosophieの如きものになる。前へ前へ接着して分離を弱めている。とは言っても、この語の母音は全て閉母音である。このような時に不完全音節のまま開音節性を維持する傾向があるのが、短閉母音である。この場合、アクセント音節で微調整が起こると考えられる。また、Autoのように、曖昧母音以外の短母音に終わる語の場合、半長母音化が起こるのも、不完全音節を是正する微調整の為だと思われる。Autosの場合に長音と意識されるのは、閉母音が閉音節に使われると長音になる傾向と、-sが複数語尾という形態的要素の付加である点で、余剰的位置にあることが自然である為であると思われる。短閉母音とは反対に、次音節がある場合、後続子音を接合音として強く要求し、完全音節になろうとする傾向があるのが開母音である。以上の考え方によって、Dogma [dɔɡma], Phlegma [flɛɡma] といったギリシャ語系の-gmaを持つ語などに見られる開音の幹母音の説明も

容易になる。この現象の出現は、いわゆる学校発音、原語の発音をより尊重しようとする姿勢に由来すると思われる。ドイツ語に外国語の発音規則を持ち込むことで、例外が生じることが多い。これらはやがて同化されるか、規則の改変をもたらすことになる。Dogmaを例にとると、この分綴はDog-maである。分綴通りの音節であるとする、音節末に有声音が来る。これはregnen, ordnenなどと同じく、後続音節が有声音で始まる場合は先行音節末も有聲であり得るとすれば、解決する。しかしこの場合、形態素などの上位の纏まりを考え合わさなければならない。むしろ、これは連続性を示している。そこで、実質音節をDo-gmaとすると、開音節に開母音が出現することになる。しかし、これは有アクセント音節であるから、前述のRoggenと同様、かろうじて出現を許容することが出来る。つまり、gは接合音的に両方の音節に繋がるのである。

#### (7) アクセント

母音の長短とアクセントは密接な関係がある。任意の複音節綴りはどこにアクセントがあるか。本来のドイツ語ならば、接頭辞を除いて第1音節にあり、外来語ならば不定とするのが、最も簡便であろう。外来語の場合、語彙的ではなく、より純粋に音韻的レヴェルで最も安定した所へアクセントが移動する。ドイツ語には、一種の語彙分類に寄与すると思われる有アクセント接尾辞が多く存在する。例えばPianist。このようなものは、最終音節にアクセントがある。そうでないものは、おおそ後から2番目にあり、Amerikaのように非アクセントの語尾が2音節にわたると意識されるものは、3番目になる。つまり、何らかの意味が予め想定されない任意の綴りは、後から2番目にアクセントを持つのが一般的なのである。実は、このことは本来語にも当てはまるとされる。本来語の語彙は、せいぜい2音節からなる語根から派生しているものが多い。2音節ならば、アクセントは初頭にある。非アクセント性の接頭辞、接尾辞が付加されても、結果として、アクセント位置は動かない。外来語では接辞性の意識が薄いので、アクセントが動くように見えるのである。

さて、日本語の語彙を、アクセントを考え合わせてドイツ語らしい綴りに移すとする。例えば「鎌倉」をKamakuraと表記した時に問題となるのは、アクセントのある開音節は長音になり、一般的にそれは後から2番目であるから、カマクーラと読まれてしまう。その他の音節は非アクセントの開音節なので、通常は短閉母音である。アクセント位置を短母音にするには、二重子音字を用いればよい。そうするとKamakurraが考えられるが、これはカマクラと聞こえる。日本語の高低アクセントをドイツ語の強弱アクセントで置換するのは無理があるが、低音から高音に移る所にアクセントを置くのが自然であると思われる。筆者の語感ではカマクラなので、マにアクセントを置きたい。すると、KamakkuraないしKamackuraが得られる。この場合、却ってクにアクセントが戻ってしまう恐れがあるので、Kamackurra, あるいはいつそのこと、より日本語の音質に近い開母音を求

めると, Kammackkurraとなるが, 煩瑣になるだけであろう。また, 語末母音の半長母音化は防ぎようがなく, どうしてもカマクラ程度にはなってしまう。先の Schuhhäiはアクセントを考えれば, Schuuhäiの方がよいとも言える。

#### (8) その他の問題

ドイツ語には, 無声の/s/で始まる語がない。従ってサ行で始まる名前はドイツ語では書けない。強引に発音させようとする時参考になるのが, ドイツ語圏で発行された, 英語の用語が極端に多いコンピュータ分野の雑誌などである。そこでは英単語をそのまま使うが, 読み方を注記してある。Windows=Winndohs, Notebook=Nohtbuckの如くであり, Playerは果たせるかなPläierである。そしてCyberはSsaiberとなっている<sup>15)</sup>。ドイツ語ではあり得ないssを語頭に用いる他はないのである。サイトウ=Ssaitoh, ササキ=Ssassacki, スズキ=Ssusuckiといった具合である。

アンナ=Annaより他に手がないように見えるが, nnは前が短母音であることを表しているから, アナである。撥音を表すには, 先頃の正書法改訂で認められた三重子音字, Schiffahrtのように, Annnaとすればよいのである。

#### 参考文献

- 1) 宮永義夫(2000) ドイツ語音韻把握の基礎(1). 山梨医科大学紀要, 17: 100-105.
- 2) 文献1), 103.
- 3) 鈴木孝夫(2001) 英語はいらない!?. PHP研究所, 東京.
- 4) Muthmann G (1996) Phonologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Niemeyer, Tübingen.
- 5) 濱川祥枝(編修主幹)(1999) クラウン独和辞典CD-ROM. 三省堂, 東京.
- 6) 国松孝二(編者代表)(2000) 小学館独和大辞典, 第2版, コンパクト版. 小学館, 東京, 17.
- 7) 文献6)
- 8) 文献6)
- 9) 文献6)
- 10) 文献5)
- 11) 文献6)
- 12) 文献4) 及び文献6)
- 13) 文献6)
- 14) 文献6), 19.
- 15) Kuppek H (2001) Computerbild, 16, Hamburg.

### Abstract

## Grundlage für das Begreifen der deutschen Laut-Buchstabe-Beziehung(2)

Yoshio MIYANAGA

Diese Abhandlung ist der zweite Teil der Forschung, welche Regeln und wie weit sie die Lernenden kennen lernen müssen, um beliebigen Buchstabierungen als Deutsch richtig aussprechen zu können. Diese Praxis der Lernenden gehört zum Studium der sprachlichen Logik, das heute vor allem für erforderlich gilt. Im Rahmen dieser Praxis haben sich unsere Studenten mit der Aufgabe beschäftigt, ihre eigenen Namen in deutscher Schreibweise zu buchstabieren, wobei Bedingungen des Gebrauchs von Buchstaben, Doppelkonsonanten, der Begriff der Silben, die Länge der Vokale und Akzent als wichtige Fragen zu beantworten waren.